

て怒ったことが新聞に報道されていたが、敬称としてオバチャンをつけるよりは兄い・姉えとした方がいいのかもしれない。

方言には長いながい歴史がある。標準語にかかわりなく大切にしたいものである。

最近では差別用語が悪いとかで新語が多く作られているが、耳にはなじめない言葉が多い。

田舎には田舎の匂いがする言葉や方言がなじむ。

浦辺で「船を雁木がんぎに着ける。」と言われて何故かなつかしさを覚えた。

寒の風 軍手よだきい もやい解く

### 表紙解説

水の子灯台は、明治三十四年末から三十七年三月まで、工費三十万円をかけて完成した、我が国屈指の灯台である。建設時のコンクリートに使った砂は、間越まごし（米水津村）海岸から運んだという。

その後何度か改装工事が行われたが、昭和三十八年二月に、我が国初の自家発電装置が完成し、百十九万二千燭光の閃白光が、毎十秒に一閃光している。

下梶寄から凡そ八哩の沖合いにあり、文字通り絶海の孤島で、海拔二十メートルが周囲は三百メートルが余の広さしかない。

灯台官舎（正式名は灯台吏員退息所）は明治三十七年、逓信省の施設（屋根瓦には㊦のマークが入れている）として下梶寄に建設された。当時の灯台守は五人から七人で、一回五日の交代勤務であったが、海が時化れば何日か詰めにされるか分からなかった。そこで火光信号により、連絡をとっていたという。

水の子勤めは泣く子もだまる。「人の子恋しゅうて夢に泣く。」と歌われたが、その職員達も二十八年八月佐伯航路標識事務所に引き揚げ、あとは無住となった。

その後官舎は鶴見町に払い下げられ、希望者には貸していたが、昭和六十年に文化財として修理し、内部を灯台資料館として、また、灯台に衝突して死んだ渡り鳥（珍鳥も多い）を剥製にして陳列しており、いまや鶴見崎観光のメッカとして、脚光を浴びている。